安成通信 2018.11.22　ヒマラヤ高地の民シェルパ族－歴史と現在－

ネパール・ヒマラヤの（3000m～5000m付近の）高地に住むシェルパ族(The Sherpa)は、その高山地域での強い順応性の故に、特に 20 世紀後半以降、ヒマラヤ登山やトレッキングにおけるガイドあるいはサポーターとして活躍しています。「シェルパ」という言葉は、民族名であると同時に、このようなガイドやサポートという職種の名前としても、広く使われています。更に転じて、主要国首脳会議（サミット）などの大きな国際会議で、本会議に先立って調整のための予備会議を行う側近や代理人もシェルパ（役）と呼ばれています。

シェルパ族は、チベット高原からきたチベット族の一派であることが最近の DNA 分析などでも明らかになっています(Bhandari et al., 2015)。では、いつ頃、どのようにしてネパール・ヒマラヤに住みついたのでしょうか。文化人類学者オピッツ(M.Oppitz)は、シェルパ族が多く住む東部ネパールのソル・クンブ地方のラマ教寺院などに伝わる文書などの解読と現地調査により、16 世紀（1533？）に、チベットからナンパ・ラというエベレスト峰の南西にある雪原の峠（写真１）を越えて入ってきたのが最初の移住であったと推定しています(Oppitz, 1973)。その後、18～19 世紀にも第二波、第三波のチベットからの移住があり、私が今回訪れたロールワリンの谷にも、谷の最奥にあるトランバウ氷河につながるテシ・ラプツァという峠を越えてチベットから下りてきたとされており、ベディン村（安成通信 2018.11.11 参照）もこの時期に作られたと考えられます。

チベットからの移住の理由について、チベット高原の北にあるタリム盆地のオアシス都市カシュガルから高原に 1533 年にイスラム教徒が侵入してきたことがきっかけだったと、オピッツは述べています。ただ、その後の 18～19 世紀における高原からネパールへの波状的な移動の理由については述べていませんが、私は気候変動も大きく関わっていたと推測しています。この時期は、小氷期（The Little Ice Age）とよばれる世界的に寒冷な気候であり、世界中の多くの氷河が拡大・前進した時期です。チベット高原やヒマラヤの多くの氷河もこの時期に拡大しています(Rowan, 2017)。寒冷な気候が強まり、遊牧と農業を生業とするチベット族の一部が、チベット高原を逃れて、相対的に暖かなヒマラヤの南に移住をめざしたという動機もかなり強かったとも想像できます。

しかし、氷河が拡大した寒冷な気候のこの時期に、ヒマラヤを越えての移動が可能だったのでしょうか。興味深い事実は積雪が多く氷河が拡大していた小氷期には、チベットーネパール国境のいくつかの峠は、現在よりもむしろ越えやすかったといわれています。ロールワリンの谷に降りる上述のテシ・ラプツァ峠も、温暖化のため、現在は氷雪が減って険しい岩場が露出して越えにくくなっていますが、積雪が多いと雪の斜面となって登降がしやすいとのことです。すなわち、ナンパ・ラやテシ・ラプツァを越えてチベットからロールワリンの谷に入り、ベディンに移住してきたのは、このような小氷期のほうが容易であったと想像できます。

ところで、谷の最奥で、氷河に最も近い集落の名前ナー(Naa)は、チベット語で大麦を意味します。大麦は、シェルパを含むチベット族の主食として最も大切な穀物であり、この麦粒を炒って粉にしたツァンパは、今でもかれらの重要な主食です。（ツァンパは日本では「麦こがし」とか「はったい粉」とよばれていますが、今では知らない人も多いでしょうね。）今回の調査に同行したシェルパ頭の話によると、かつては（チベットより暖かい気候の）ナー付近で大麦を作ってツァンパにし、それをチベットに運んで、チベット特産の岩塩と交換する交易がかつては盛んであったとのことでした。しかし、20 世紀後半以降、チベットの政治状況の変化やその後の気候の温暖化と氷河の縮小などにより、この交易も途絶えてしまったようです。加えて、ナー村は氷河の縮小に伴う GLOF（氷河湖決壊洪水）の危険性にも晒されています。

現在のシェルパ族は、登山隊やトレッキングのガイド業の他、山間部での土木建築業などで、ネパールの経済にも大きな貢献をしていますが、そのために、かれらの多くは、家族ごとカトマンズに移住し、ヒマラヤの村々での本来の農牧業を辞めてしまい、その結果「ヒマラヤの過疎」現象が起こっています。カトマンズ暮らしが中心となった若者たちには、ネパール語や英語は堪能でも、シェルパ語は話せないという人も増えてきています。シェルパ族の人々は、もともと「ヒマラヤの生活」に生きがいを持っていた人たちでしたが、かれらの伝統と文化、そしてアイデンティティを今後どう維持できるか。世界の「近代化」の中で、シェルパ社会も変容しつつ、大きな課題を抱えていることを感じました。

（参考文献）

Bhandari et al. 2015: Genetic evidence of a recent Tibetan ancestry to Sherpas in the Himalayan region. Sci. Rep. 5, 16249; doi: 10.1038/srep16249.
Oppitz, M. 1973. Myths and facts: Reconstructing some data concerning the clan history of the Sherpa. Kailash 2 (1):121–131.
Rowan, A.V. 2017: The ‘Little Ice Age’ in the Himalaya: A review of glacier advance driven by Northern Hemisphere temperature change. The Holocene, 27(2) 292–308.
安成通信 2018.11.11　ヒマラヤにおける GLOF 問題.

写真１：中国（チベット高原）とネパールの間の標高約 5700m の雪原の峠ナンパ・ラ(Nangpa La)を越えるチベット人の隊商.

Photo By Dargaud - https://commons.wikimedia.org/w/index.php?curid=7234674

写真２：ロールワリン・ヒマラヤの山道（標高 3500m付近）で撮ったシェルパ族の子どもたち。ダサイン（ヒンズー教の大祭）の休みを利用して、祖父母が暮らす山の村ベディンやナーに遊びに行くところ。　（安成哲三撮影）